

いちぶつぜんたい 一物全体

金沢区 松瀬 観 翁



松瀬 観 翁

昭和二十九年三月

マクロビオティック (MACROBIOTICS) なる言葉を聞いた事があるだろうか。マクロとは大きい、長いという意味で、ビオは生命の事。ティックは術、学を表し「長く思いっきり生きるための理論と方法」となる。

その為には大きな視野で、生命を見る事が必要となる。

物事を分断分析していく現代科学に対する反省として『全体は部分の総和ではない』と言われる様になった。つまり、全体は全体としてある時、部分の総和を上回る特別な働きをしようとするのである。食物についても同様に【一物全体】とは一つの物を丸ごと食べる事を言う。生命は個体全体でバランスを保っており、野菜なら皮をむかず、アク抜きとかゆでこぼしをせず、葉や根の部分も食べる。穀類なら精白していない物を食べる事により食物本来の生命力を頂く事ができるのだ。

キルリアン写真で見ると玄米からはオーラが出ているが、白米からは出ていない。この事は、玄米は生きているが白米は死んでいる事を意味する。玄米と白米を庭に蒔いておくと雀は玄米の方しか食べない。皮肉な事だが知能よりも、本能で判断する雀の方が正しい選択をしているのである。ヒトはデジタルなミクロ的思考に走りすぎ、アナログなマクロ的思考が不得手となり「生きている物と死んでいる物」の区別さえ出来なくなっている。

以下の現象を貴方はどう考えるであろう？

①パンダは笹の葉しか食べない。それなのに

あの豊かな体（脂肪）はどの様にして出来るのか？大自然の中の牛だって牧草しか食べていないのに、肉（タンパク質）や骨（カルシウム）をつくっている。草の主成分と言えば水分とカリウムのはずであるが……

②食べた物が血をつくり、それが生理的には肉体をつくっている。食物は消化器官を経て小腸に入り、腸壁の絨毛により吸収される。もし、血液（血球）が骨髄で造られるのなら、吸収された栄養はどういうかたちで骨髄まで運ばれるのであろう。透明な液体とでもなって流れて行くのであろうか？成人の骨髄（黄色骨髄）は幼若時（赤色骨髄）とは違って脂肪組織で置換されて、盛んに造血を行っているとは、とても思われぬのだが？

①はルイ・ケルブランの原子転換説により②は千島・森下の腸造血説により説明できるが現代医学は共に認めてはいない。現代医学と栄養学は、食物をエネルギー材と栄養素材としか見ておらず“目に見え難い生命現象”の最も重要な部分を見ないで、結果だけを問題にしている。原因の追究は殆どしておらず、病気を治すのではなく、ただ症状を消すだけの“数値合わせの対症療法の医学”である。

『現代医学には▽△（陰陽）の哲学が入ってはならず、恐ろしい事だ！』と大森英桜氏は嘆く。確かにそれはガンの治療法ひとつを見てもよく分かる。ガンは▽（陰性）の病気であるにも拘らず、▼（極陰性）の放射線や抗ガン剤を使っている。これはガンを溶かすものは発がん剤であるという事実を無視している。“陰は陰を排斥し、陰は陽を牽引す”という事を知ってれば、こんな馬鹿げた治療は決してしないはずである。言いかえるならガンの治療法は△（陽性）のものでなければならない。手術して切除する事は、一物全体に反する事であるし、病巣を取っても治したのではなく壊した事になる。治すとは元ある状態に戻す事を言うからだ。正食医学で言う

治療とは、何処の家庭の台所にでもある様な物を使って治す事を言い「必要な物がなかったから、やらなかった」という言訳も許されない。彼は自信に満ちた表情でこう語った。『医者 of 言う事に反対はしないが、私が患者なら断わる』と……